

+ 6 7 【ふじこ】

夏休みの自由宿題で、童話を書くことに決めました。

表題は『ふじこ』（これは隣のお姉さん山本不二子さんからとったものです）とするつもりで、ぼくは一応、懐爺に相談しました。

懐爺はやや青ざめて、

「それは金ちゃんの処女作ですよね」

と変なことをいいました。

「しょじょさく、たあ、なんじゃ」

「はじめて書く作品のことです」

「ならば、わたしには、どうていさく、じゃろが」

「童貞作ですか。そういういいかたはしませんねえ」

「だば、だんじょさべつ、じゃろが」

「男女差別ですか。それならわたしもこれからは、男がはじめて書いたものを童貞作、女がはじめて書いたものを処女作とよびましょう」

「それでええ」

「さてと、童話を書くことには反対しませんが、表題は女の名前にしないほうがいいですよ」

「どうしてかのう」

懐爺はぼくに、こう説明しました。

川端康成の掌編に、『処女作の祟り』がある。

その粗筋は、川端の処女作である『ちよ』の話からはじまる。

こどもの〈私〉のところに、千代松がやってきて、〈私〉の祖父の借金証文を、〈私〉の名で書き替えてくれといたので、そうした。

こどもにそんなことをさせるのは、あまりに可哀想だと、村びとたちは千代松を「鬼」だといった。

その後、千代松の娘の「ちよ」から手紙がきて、父の遺言だからと、金を送ってきた。

〈私〉は、千代松が「鬼」とよばれていたのを苦しめたのかと、気の毒におもった。

〈私〉はその金で伊豆の旅にでて、踊子に淡い恋をしたが、彼女は、

「ちよ」といった。

東京に帰って結ばれぬ新しい恋をしたが、その娘も「ちよ」だった。

また、処女作に、『ちよ』という表題をつけたのは、学友に譲ってしまった、片おもいの白木屋の女給の名が、「ちよ」だから、そうしたのであった。

ところが『ちよ』を発表してすぐに、学校の図書館で〈私〉の村の重大事件を知った。

岩男という男が発狂し、女房と娘を斬り殺して首を吊って死んだ。

娘だけは、指を四本落とすだけで助かった。

実は、この岩男こそ千代松のことであり、指を落とされた娘が、手紙をくれた「ちよ」であった。

それから、新しい少女に恋をして、結婚の約束をしたものの、その少女は「ちよ」子。

不幸で不吉で、血なまぐさい事件ばかりが起きて、それがみんな「ちよ」つながりだという話が、まだまだ続くというものである。

「つまりその、金ちゃんも、童貞作の表題に女性の名前を付けると、祟りが祟りをよんで、『ふじこ』つながりで、不幸で不吉で血なまぐさいことばかり起きる気がします」

「そうか。かわばたせんせが、そうかいとるのか」

「はい。川端先生は、魔界（まかい）に通じている作家ですからねえ。無視するわけにはいきません」

「だども、それは、『ちよ』だからじゃろ。『ちよ』というなまえが、いかん。『ふじこ』というなまえなら、もんだいなかろう」

「【ふじこ】は、おばけになる可能性があります。もしも問題があったら、金ちゃんだけが不幸になるわけではありません。山本不二子さんも不幸になるのですよ。おばけの可能性は、はじめに断たなければ後悔しますよ」

懐爺に強くいわれては、強情なぼくでも、おれるほかはありません。

たしかに、隣のお姉さんに、これ以上厭なおもいをさせたくはありません。

「ようわかった。だば、だいは『かい』にするかのう」

「勘弁（かんべん）してください。くわばら、くわばら」

懐爺はますます青ざめる。

「じょうだんじゃ」

「冗談ではありませんよ。女性にだってそういう名前がいますよ。やれやれ、おしっこちびりそうになったではないですか」

百戦錬磨（ひゃくせんれんま）の懐爺がそんなわけはないとおもったけれど、人の名前を表題にするのはやめました。

それでぼくは、童話の表題を、『金』とすることにしました。

童話は完成し、先生がとても感心して、教室でぼくの童話『金』を読み上げました。

それから、十年、二十年、三十年、四十年、五十年、ぼくがどれほど〈金〉に苦しめられてきたかは、知る人ぞ知る、です。